

## はしがき

17のゴールと169のターゲットからなるSDGsを中核とする「2030アジェンダ」が採択されて9年が経った。今日本では90%近い人がSDGsを聞いたことがあり、半数強の人々がSDGsに関心があるといわれる。SDGsのロゴは日常的にみかけ、国・地方の政府、企業、市民社会、学校など多様なセクターがSDGsの達成を組織の理念に掲げるようになった。国際的にみても世界の多くの国や地域でSDGsは各国の中長期計画に組み込まれている。

しかし、SDGsの達成状況はというと、世界的にも、日本をとっても残念な状況にある。終章で紹介するように、2024年6月に出された国連の2種類の報告書によると、17のゴールの中で達成に向けて順調に進んでいるものは1つもなく、ターゲットも17%しか達成の軌道に乗っていない。ゴール・ターゲットの中には2030アジェンダの採択当初から達成状況がよくないものや後退が指摘されるものがあったし、新型コロナウイルス（COVID-19）パンデミック、ロシアの侵略に始まったウクライナ危機など、SDGsの策定過程や採択時に誰も予想しなかったさまざまな危機がSDGsの進捗に大きな影響を与えた。

本書では、SDGsやそのゴール・ターゲットの背景にある経済・社会・環境についての基本的な考え方やその変化を理解することとともに、SDGsの達成状況を検証し紹介することを目的としている。

SDGsの達成状況については、本書の各章では2023年までに出版された国連などの報告書を用いているが、終章で2024年6月に出版された国連の重要な報告書2点の最新のデータも紹介している。

また本書の巻末にはSDGsのゴール・ターゲットの日本語訳を掲載している。筆者と大橋正明の共編の『SDGsを学ぶ』（2018年）では、外務省から出ている仮訳をベースに、編者2人がもった疑問点を踏まえて改訂したものを掲載した。本書にはそれを基本的に転載したが、執筆者の方々からいただいたコメントをもとに若干の修正を行った。

本書の企画は、『SDGsを学ぶ』を出版して1年後、その成果の検証を含めたフォローアップの企画のご提案を法律文化社の舟木和久さんからいただいたことをきっかけに始まった。その直後に COVID-19パンデミックとなり、そのSDGs達成状況への影響を見極めることのできるタイミングはいつなのかを模索することとなった。一方で企画を進めていく中で、経済・環境をそれぞれ専門とする須藤智徳・小坂真理両氏にも編者として参加していただき、本書の内容が固まっていった。『SDGsを学ぶ』に引き続き、本書の企画・編集にご尽力いただいた舟木さん、SDGsに関する書籍を積極的に手がけている法律文化社に感謝申し上げたい。

本書出版時点でSDGsの達成期限まで6年である。本書が日本社会でSDGs理解がいっそう深まること、国際的なSDGsの達成に近づくために日本の国際協力のあり方についての議論が高まっていくことのきっかけとなれば筆者一同のよろこびである。

2024年8月 猛暑で気候危機を実感しながら

編著者を代表して、高柳彰夫